

追分より見たる淺間山噴火の狀況

市川 徳 一

急激なる空氣振動のため戸障子の猛烈なる音響に床を跳起き直に北窓を明けて望見したる時は山頂は既に鎔岩散布し居り一面の火の海の如く眞紅を呈しその狀實に悽愴を極めたり時に午前一時九分。

然るに間もなく第二の噴火を起し眞赤なる火の柱を噴き揚げたりと思ふや直ちに前よりも更に遠く鎔岩を放出し火の海は一層擴大し慄然たらしめたり。

第二の噴火に次いで第三回を噴出したる時は精神も稍落ちつき居たるにもかゝらず更に慄然たらざるを得ざりき、これ火の柱も第二回より更に高く又鎔岩の散布の區域遙かに擴大して西は劔が峰の頂上より南は石尊の頂に來り東は彌陀ヶ城岩の南端迄を一面の火の海に化したればなり。然るに第三回目を噴出したる時は第二回目の場所は夜露が蒸氣となり水平に雲を棚引きたり。

而して第三回放出の際は劔ヶ峰を突破せる大なる鎔岩三ヶ所に落下し何れも相當時間紅を呈し居たり此の三回目の時に彌陀ヶ城岩の南端其他數ヶ所に野火を起したるも何れも小なるものにして被害は極小なり。

其後數回に亘り小噴火を起し火の柱を噴出したるも皆鎔岩は火口東方附近に落下し眞紅となりし面積も極く小なりき。

噴煙は終始黒煙蒙蒙と立昇りその間電光盛に起り殊に球電の發生は珍らしき現象なり午前二時二十五分には殆んど噴煙量なき迄に少量となる。(追分支所市川徳一記)